

室戸台風による京都市の「師弟愛の像」建立とその変遷

植村 善博*

I. はじめに

1934(昭和9)年9月21日早朝、室戸岬から大阪湾に進入した大型の室戸台風は午前7時半頃大阪市、8時半頃京都市の上空を通過した。このため、暴風による倒壊や高潮による浸水など多大な風水害を発生させた¹⁾。とくに、小学校を中心に耐風性の弱い木造校舎の倒壊や大破により多数の児童と教員が犠牲になった²⁾。京都府下で死亡した教員は5名、児童は166名で計171名に達し、全死者の69%と高い比率を占める³⁾。筆者は京都市とその周辺で多数の犠牲者が発生した小学校の事例を検討し、校長らの避難指示の決断時期の遅れや伝達方法に問題があったことを示した⁴⁾。犠牲者を出した小学校では教員が児童の保護および避難誘導に当たっている最中に校舎が倒壊し、避難中の児童を抱きかかえて護り、本人は落下物の下敷きになって殉死した例が知られる。このような殉職教員は文部省⁵⁾や京都府⁶⁾によって「悲壮沈着な態度と燃えるがごとき教育愛による美事」として激賞され、理想の教師像として積極的に宣伝、顕彰された。京都市付近では室戸台風関係の慰霊碑や殉難碑、記念碑が10件確認され、その特徴と慰霊行事などについて報告されている⁷⁾。近年の災害研究において供養塔や記念碑の重要性が再認識され、その特徴や建立経過、記念碑文化、災害遺産としての価値が議論されるようになってきている⁸⁾。これらは地震や津波に関連するものがほとんどである。一方、京都市内には室戸台風により学校で死亡した教員と児童に関連する「師弟愛の像」が4件存在する⁹⁾。すなわち、知恩院(新・旧)、大谷本廟、京都女子大学にあり、犠牲になった教員と児童の慰霊と顕彰、台風災害のシンボルとして引き継がれてきた貴重な災害遺産である(第1図)。しかし、これらは市民に十分認知されておらず、研究されたこともない。また、風災記念碑は震災や水害の碑が多い中では異色であり、その建立目的や災害遺産としての意義を検討することは重要な課題といえよう。



第1図 京都市の「師弟愛の像」位置図

本稿では京都市内の4件の「師弟愛の像」について、建立目的と経過、製作者と芸術作品としての価値、建立後の変遷を明らかにし、災害の多発する現代における意義について考察する。

II. 知恩院東門横の「師弟愛之像」

1. 「師弟愛之像」建立の経緯

祇園新門前通の東端に浄土宗総本山知恩院の巨大な三門が威容をみせる。その右(南)側の東門横に高さ約3m、幅2.3mの「師弟愛之像」(所在地:京都市東山区林下町知恩院東門横)がひっそりとたたずんでいる(第2図)。高さ約2mの花崗岩の台石の上に幅1.3m、高

* 立命館大学歴史都市防災研究所客員研究員



第2図 東山区知恩院の師弟愛之像（2017年5月）

さ1.1 mの女教師と7人の児童のブロンズ製群像が置かれている。碑台正面には「師弟愛之像」および吉井勇が詠んだ「かく大き愛のすがたをいまだみずこの群像に涙しながる」の歌碑がはめ込まれている。裏面には「師弟愛の像」再建によせて、という京都市長高山義三が記した碑文（第3図）がある。その文には「室戸台風で失われた162名の学童とこれら学童を守って殉職した4名の教員の悲しみを永遠に記念するために師弟愛の像が建てられた。第二次世界大戦末期に銅像は軍需資材として供出されてしまい、台石だけが無残な姿をさらしていたという。その後全日本教育父母会議京都府支部を中心とする再建委員会により復元された」ことなどを記す。本像は1944（昭和19）年に撤去された旧像に代わる新たな像として設置されたもので、淳和（現西院）小学校で児童を護って殉死した松浦壽恵子訓導を顕彰したものとされる¹⁰。新像設置の契機は室戸台風から25年目に近い1957（昭和32）年9月に西院校育友会（広瀬止水会長）が中心となり被災した11の小学校の育友会長らによって室戸台風被災師弟愛の像再建委員会が結成され、募金運動を進めたことに始まる。これを全日本教育父母会議



第3図 東山区知恩院、師弟愛之像の裏面碑文（2017年5月）

京都府支部が支援、さらに京都新聞社や京都観光連盟による援助を受けて完成したことが碑文からわかる。京都市右京区の岩沢ほん鐘会社は実費だけで铸造を引き受け、1960（昭和35）年9月20日に像が完成した¹¹。しかし、目標額の80万円に達せずさらに街頭に立って募金をおこなったという。1960年10月21日には被災者の遺族ら約100名が参列して知恩院境内で除幕式が挙行され、除幕した高山市長は「この像は崇高な教育愛のシンボルだ。教育者の子供に対する深い愛情と強い責任感の結晶である」と述べている¹²。新像は放置されていた旧台石の上に置かれておりアンバランスな感じを受ける（第2図）。

2. 製作者

新しい「師弟愛之像」（以下新像とよぶ）は愛媛県新居浜市を拠点に活躍した彫塑家日野浩三郎（1911～1985）が製作したものである（第4図）。旧像を製作した小倉右一郎氏が老齢のため、愛弟子の日野が新像の原型を作ったという¹³。日野（旧姓秦）は愛媛県西条市氷見末長の農家に生まれ、高等小学校卒業後大工見習などをした。彫刻を学ぶために21才で上京。最初、木彫を上田尚治氏に学んだが、後に東京田端駅近くで香川県出身の小倉右一郎氏が主宰する滝野川彫塑研究所に入門した。日野は小倉による指導を受けて才能を開花させ、塾頭に抜擢されて後身の指導に当たるようになる。1937年には第1回新文展に「うら町の少女」が入選し当時の話題を集めた。以後1939年まで連続3回入選を果たした。昭和15年に帰郷、松山連隊に入ってビルマに派兵されここで終戦を迎え復員した。戦後は郷里で活動を開始、



第4図 日野浩三郎（1911～1985）1960年頃、
（『神郷小学校児童像修復完成記念式典』より）



第5図 新居浜市立神郷小学校の児童像
(1965年建立、2018年5月)

1950（昭和25）年頃新居浜市中萩に居を移した。1950年の日展において「裸婦」が入選、以後女性像の作品で3回入選を果たした実力派である¹⁴。とくに、児童の群像や人間の絆をテーマにした公共の場におかれる作品を得意とした。新居浜市役所前中央公園の市民像（1957年、新居浜駅から移動）や神郷小学校の児童像（1965年、第5図）などが代表作で、新居浜市とその周辺に作品が残されている。また、新居浜市アカガネミュージアムには遺族から寄贈された多くの作品が収蔵されている。日野は愛媛県的美術会や県展の会員、審査員として発展に尽力し、1985（昭和60）年8月16日に逝去した¹⁵。「師弟愛之像」は1960年に完成、前述の2作品の中間に位置し制作意欲の最も高かった時期の優れた作品として注目される。

3. 旧像「風災学童慰霊塔」建立の経過

1960年に再建された知恩院の「師弟愛之像」に対して戦前には旧像が存在した。これについてはほとんど知られていない。旧像の建立に中心的役割をはたしたのは京都日日新聞社であった。同新聞によると、「風災により逝った170の幼魂と5つの教霊を永遠に弔い、また天災に対する不断の警鐘たらしむこと」を目的として、紙上で慰霊塔建立を發起し募金活動をおこなっている¹⁶。その結果、92,020口、総額8,465円の浄財が集まり、1935（昭和10）年5月11日にブロンズ製「風災学童慰霊塔」（以下旧像とよぶ）が知恩院三門南に完成されたのだった（第6図）。当日は知恩院管長岩井大僧正を導師として約5千人が参加して竣工除幕式が挙行されたと



第6図 知恩院の風災学童慰霊塔（京都日日新聞¹⁶より）

いう。そして、「痛ましき犠牲者を弔う郷土の赤心、風災学童慰霊塔が遭難学校学友代表10名により綱を引いて除幕された」、「風災以来九カ月郷土民の赤誠は永劫不滅の塔となり燦然として郷土を護ることとなった」と誇らかに記し、「教育史上に誇るべき渾然一体の師弟愛は災禍を超越して永遠の彼岸に表旌され…」と述べている¹⁷。すなわち、塔の題字は清浦圭吾伯爵によるもので、遭難した教員と学童175名の氏名を刻んだ4個の銅碑を塔内に埋納したという¹⁸。さらに、同新聞は「コドモのページ」に慰霊祭特輯号「慰霊塔を仰いで」として5月15日から被災経験をもつ児童の感想文を連載した¹⁹。1935年9月20日には慰霊塔前で風災学童1周年追悼会を執行している²⁰。翌21日には京都府・市主催の1周忌慰霊祭が昭和会館で執行された。風災学童慰霊塔は著名な彫刻家であった小倉右一郎氏に製作を依頼、「一生の仕事としてこしらえましょう」と受諾の意志を伝えている²¹。

筆者は2017年に京都市立向島小学校および八幡市立八幡小学校を調査した際、校長室に置かれた小さな鋳物製の像に直面した。これは幅18cm、高さ13cm、重さ約2kgのどっしりした置物で（第7図）、底面に貼り付けられた鉄板には「昭和九年九月二十一日風災学童慰霊塔 京都日日新聞社」と刻んである。この像は7人の幼児を抱きかかえ天を見据える女教師の像であって、新聞



第7図 京都市立向島小学校の铸件製風災学童慰霊塔
(2017年6月)

掲載のもの（第6図）とよく似ている。しかし、幼児の表情が稚拙で明らかに別人による複製物であると判断できる。これらは京都日日新聞社が別に模倣品を作り学校や関係者らに配布したものと推定される。また、西院小学校に保管されている石膏製の「師弟愛の像」は複製物からさらに型を作った石膏像で、西院教育会が製作して学区民に配布したものであろう。

知恩院に建立された風災学童慰霊塔のデザインは小倉右一郎が1934（昭和9）年第15回帝展に出品した「殉職」（第8図）と非常によく似ている²²⁾。これは女教師が手を広げて悲嘆にうめく6名の児童を両腕に抱えたものである。帝展の出品年とタイトルから室戸台風時の児童を抱えて殉職した教師がモチーフになっていると推定される。この作品との関係から著名な小倉に慰霊塔の製作が依頼され、「殉職」像に変更を加えて完成されたのであろう。すなわち、慰霊塔では子供が7名と1名増え、かつ悲惨な表情が弱められたものになっている。



第8図 小倉右一郎作「殉職」（『日展史』²²⁾より）

4. 製作者

旧像を製作したのは小倉右一郎（1881～1962）である。香川県大川郡白鳥町湊（現東かがわ市）の定国三郎・祐子の次男で、幼少より絵や工作がずば抜けていたといわれる（第9図）。17才で同県寒川郡石田村（現さぬき市）の素封家の小倉家に養子縁組した。1898（明治31）年に開設された高松工芸学校の1期生として入学、5年間首席を通して卒業。その際、進学に反対する実家や養家を同校長の納富介次郎が説得、ついに東京美術学校彫刻科へ無試験で入学している²³⁾。同期には朝倉文夫、藤井浩祐、池田勇八など後に日本彫刻界をリードする錚々たる人物がいた。1906年小倉家の娘富士乃と結婚、1907年に26才で彫刻科を主席卒業。翌年の第2回文展で「指導」が初入選、以後文展、帝展に連続入選している。美術学校の校長は「小倉君は天才ではないが努力家で組の1番でなければ気のすまない性格で人1倍努力した」と讃えている²⁴⁾。1920～21年にフランス・イタリアに遊学して見聞を広め、ロダンの写実と人間性の表現に共鳴したといわれる。帰国後は文展審査員などを務めるとともに、滝野川彫塑研究所を主宰して後進の指導に当たるなど積極的に活動した。戦前期、朝倉文夫らと東台彫塑会を結成、官展の一大勢力をなし彫刻界の指導的立場にあった²⁵⁾。作品は写実的な肉体美と劇的瞬間の表現に優れているとされ、災害をテーマにした作品が存在する。1924年の第5回帝展に出品した「濁流の中」は関東大震災時の津波にのみ込まれた夫婦の壮絶な姿を示したものである²⁶⁾。また、1931（昭和6）年5月に除幕



第9図 小倉右一郎（1881～1962）、
1920年頃（香川県東かがわ市定国聖一氏の資料より）



第10図 小倉右一郎作「震災遭難児童弔魂像」
(定国聖一氏の資料より)

された関東大震災による遭難児童の群像「震災遭難児童弔魂像」(第10図)はその悲惨な表現で批判を受けたといわれるが、戦時中に軍事供出された。戦後、門人らによって1961(昭和36)年9月1日墨田区横網公園に新像が再建されている²⁷⁾。1934年には「殉職」があり、小倉の劇的表現への意欲と災害への関心が一致したものであろう。

1935年以後、靖国神社の「忠魂碑」や熱海伊豆山の「興亜観音像」など戦争協力的作品を製作している。京都市左京区岡崎、京都府立図書館前に上田貴久丸との合作による「二宮尊徳先生像」(1940年)を見ることができる。大戦中は高松市で疎開生活を送った。空襲により全滅した母校の復興指揮を県知事から依頼され、1946年6月(65才)高松工芸学校校長に就任した。1952年3月退職まで6年間に在職し同校再建に大きく貢献している。彼は復興資金委員会を作り、寺の釣鐘42個、半鐘8個などの注文をとって教員生徒一丸となって制作に取り組み設備購入費に充てたという²⁸⁾。小倉はこれを平和の鐘と称し、表面に天使をデザインしている。これには戦前の体制協力に対する慚愧と再出発への思いをこめ、教育活動に集中したように思える(第11図)。なお、戦後の作品として1950年に広島家庭裁判所の『平和の女神像』などがあり、1956年には第1回香川県文化賞を贈られている。戦後の新像を製作した日野は滝野川彫塑研究所で小倉の門下生となり、塾頭に抜擢されるほど厚い信頼を受けた。このような師弟関係から日野が新像の製作を託されたと推定される。



第11図 小倉右一郎、高松工芸高校校長時代
(定国聖一氏の資料より)

Ⅲ. 大谷本廟の「師弟愛の碑」

1. 「関西風水害罹災学童碑」建立の経緯

交通量の多い五条坂交差点の東に大谷本廟がある。緑濃い森に囲まれた前庭の円通橋を渡った左側に径約2mの巨大な岩塊が樹林中に鎮座している(所在地:京都市東山区五条橋東6丁目)。正面には高さ1m、幅60cmのブロンズ製レリーフがはめ込まれており、傍に「師弟愛の碑」の説明板がある(第12図)。レリーフには2人の児童とそれを両腕で抱きかかえる女性が彫られており、右下に「昭和十年九月浩祐」と署名が認められる(第13図)。岩の裏面には「関西風水害罹災学童碑、昭和十年九月会一日」と記した銅版が貼つけられている。すなわち、本碑は室戸台風から1周忌にあたる1935(昭和10)年9月21日に建立された「関西風水害罹災学童碑」である。製作者は西本願寺から製作を依頼された彫刻家藤井浩祐で、「風と水とをあしらって可憐なる児童を身をもって護らんとした教師の崇高な姿を彫んで清滝川か



第12図 東山区大谷本廟の師弟愛の碑(2017年5月)

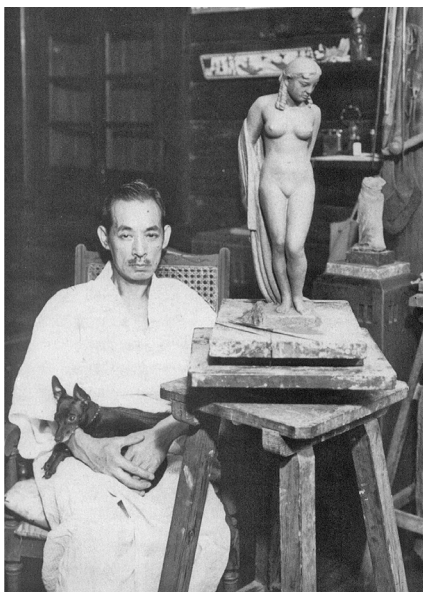


第13図 東山区大谷本廟 師弟愛の碑拡大 (2017年5月)

ら採取した天然石にはめた」という²⁹⁾。本碑は浄土真宗本派西本願寺の日曜学校関係者が中心になって集めた寄付金を主な資金として建立され、1周忌には大谷本廟で除幕式および追悼法要が挙行された。本碑の説明板にある「師弟愛の碑」は通称であり、本来の名は「関西風水害罹災学童碑」であって師弟愛の名称は存在しない。

2. 製作者

製作者藤井浩祐 (1882～1958) は東京市神田区錦町の九条家の執事藤井祐敬の長男として生まれる (第14図)。府立第4中学に入学、中途退学して不同舎でデザインを学んだ。1902年東京美術学校予科に入学、藤田文蔵、白井雨山に師事、1907年に卒業した。その後、太平洋画会研究所に通う。同年の第1回文展から連続出品し、1913年の第7回文展で「坑内の女」、翌年同展で



第14図 藤井浩祐 (1882～1958年) 1940年頃、
(['ジャパニーズ・ヴィーナス 彫刻家藤井浩祐の世界']より)

「トロを待つ坑婦」という労働者の肉体を扱った彫刻で連続3等賞を受ける。以後は裸婦像を中心に優美で官能的な作品によって評価されるようになる³⁰⁾。また、メダルやトロフィー、レリーフの工芸品など多様な作品を手がけている。1907年から文展に連続入選、1916年に再興日本美術院に移り約20年間院展を代表する彫刻家として活躍するとともに、太平洋画会彫刻部で後進の指導にあたった。1914年彫刻家としては最初の個展を銀座の三笠美術店で開き、1923年に『彫刻を試みる人へ』の著作を出版している³¹⁾。1935年には日本帝国芸術院会員に推されて官展に復帰した。戦後は1946年の第1回日展に裸婦を出品、以後連続出品するとともに審査員や運営理事を歴任している。彼は戦前・戦後期において日本彫刻界の重鎮として活躍した人物であり、1915年頃西本願寺の大谷光明と実弟の蓮杖尊枝に彫刻の指導をしたことがある。その縁から、藤井に本碑の制作が依頼された可能性が指摘されている³²⁾。本碑は女教師の姿を慈悲深い天使のような表情に表現し全体に静寂で優美な雰囲気をもつ点で彼の作風を如実に示した作品として評価できる。

IV. 京都女子大学の「師弟愛の像」

1. 「師弟愛の像」建立の経緯

東山七条交差点から東へ通称女坂を上って右側、京都女子大学E号館前の庭に小さな碑が置かれている (所在地: 京都市東山区今熊野北日吉町E号館中庭)。2人の児童を両腕で抱きしめる女性を彫ったブロンズ製レリーフが高さ1.6m、幅1.1mの緑色岩の自然石にはめこまれている (第15図)。傍らの説明板に「師弟愛の像」と記し、「室戸台風時、(大阪府)豊能郡豊津小学校



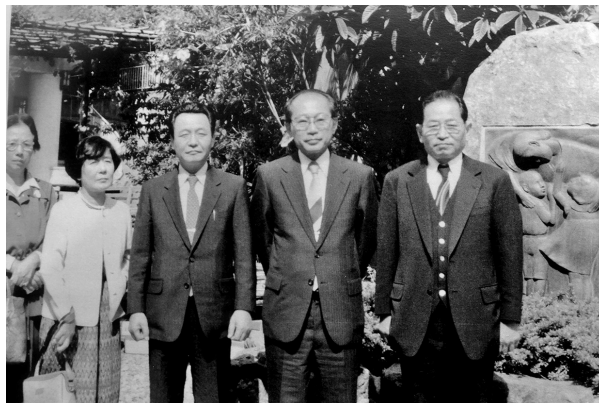
第15図 京都女子大学の師弟愛の像 (2017年6月)



第16図 横山仁子和（1909～1934年）
（吹田市立博物館資料より）

の校舎倒壊で3人の児童を自分の体の下に支えて命を救い、自分は殉死した横山仁子和訓導の殉職の碑である」と述べる。横山仁子和（1909～1934）は1909（明治42）年2月25日香川県丸亀市船頭町横山邦太の長女として出生、地元の敬愛高等女学校卒業後京都女子高等専門学校国文科に入学、1929（昭和4）年3月に小学校本科正教員免許を受領して卒業した^{33）}（第16図）。その後、大阪府三島郡山田尋常小学校に勤務した後、1934（昭和9）年8月31日に豊能郡豊津尋常小学校に転勤している。その21日後に室戸台風に遭遇、校舎倒壊により25才で殉職した。3年口組担任の横山は2階教室で最後の児童を避難させ階段を下りる最中に校舎が倒壊、教え子3人を抱きかかえ落下物により絶命した。幸運にも3児童は無事であったという^{34）}。

像の左側面には「昭和五十八年三月、寄贈京都女子大学名誉教授藤田義憲、京都女子大学校友会」と刻む。本像は、1982年3月に同大学の藤田教授が定年退職に当たり記念に何かを残したいと資金を提供、検討の結果大谷本廟の「関西風水害罹災学童碑」のレリーフを複製することに決定したものである^{35）}。碑は室戸台風から50年目にあたる1983年4月に完成、碑台や周囲の整備費用は同大学校友会が補助したという。羽溪^{36）}によると同年には「師弟愛の像」とプロデールの「自由」の彫像が建立されたとある。自由の像は体育館前に立ち学生を見守り続けている。自由の像は昭和51年12月に京都女子大学維持会が九条武子没後50年記念として購入、1983年3月に同大学校友会が台座を寄贈して建立された。この2像は当時進められたキャンパス整備計画の一環として1983年3月と4月にあいついで設置されている。室戸台風の50周年目は偶然だったのだろう。なお、横山が



第17図 京都女子大学師弟愛の像を訪問した豊津第1小学校の関係者、右から2人目が佐々木進校長（1983年10月6日、京都女子大学資料より）

勤務していた豊津小学校（現吹田市立豊津第1小学校）は1983年9月18日に被災者五十回忌追悼法要を執行、京都女子大学関係者も参加している^{37）}。さらに、同年10月3日には佐々木進校長や当時の教え子らが供養のため大学の本像を訪問した写真（第17図）が残されている。横山訓導の縁により元勤務小学校と卒業大学が相互に交流していたことは注目されよう。本碑は藤井浩佑氏製作による「関西風水害罹災学童碑」の複製であり、約50年後の京都女子大学キャンパスに設置された際、「師弟愛の像」に名称を変えられたのである。さらに、「建学の精神を体現した人間像を示す像であり、いつまでも彼女を忘れまいと誓う記念碑である」と位置づけられていることは注目される^{38）}。

V. 考察

1. 建立目的

京都市内には1934年9月21日の室戸台風により犠牲となった教員と児童を慰霊鎮魂する4つの「師弟愛の像」が存在した。これらはすべてブロンズ製である。その歴史の変遷をみると、戦前期に建立された2件およびこれらと親子関係をもつ戦後の2件に分けられる。それらの名称や特徴を第1表に整理して示した。すなわち、知恩院の風災学童慰霊塔は1935年5月11日に除幕され、1944年に軍需供出のため撤去されてしまった。この再建運動が1957年頃から被災学校の育友会関係者を中心に始まり1960年10月21日に新像が師弟愛之像と名を変え除幕された。一方、大谷本廟に建立された関西風水害罹災学童碑は1周忌の1935年9月21日に除幕と供養を行っている。本碑は戦前戦後を通じて存在しており、

第1表 京都市内の師弟愛の像一覧

名称	場所	建立年月日	製作者	建立主体
風災学童慰霊塔	東山区林下町知恩院三門南	1935年5月11日	小倉右一郎	京都市日新聞社
師弟愛之像	東山区林下町知恩院東門横	1960年10月21日	日野浩三郎	室戸台風被災師弟愛の像再建委員会
関西風水害罹災学童碑	東山区五条橋東6丁目大谷本廟	1935年9月21日	藤井浩祐	西本願寺日曜学校
師弟愛の像	東山区今熊野北日吉町京都女子大学	1983年4月	藤井浩祐（複製）	京都女子大学

現在は師弟愛の碑と呼ばれている。これは1983年4月に京都女子大学関係者により複製され、同大学キャンパス内に師弟愛の像と名を変えて設置された。戦前に建立された2件は室戸台風により犠牲となった教員・児童らの慰霊のシンボルとして製作された。台風から1年以内の記憶が新鮮な間に設置され、犠牲者の冥福を祈り災害の恐ろしさを伝えるために建立されたものである。知恩院の旧像は小型の鋳物製が製作され被災校や関係者に配布されている。これらは今日まで京都市内や周辺の小学校などに保存されており、室戸台風を語る貴重な災害遺産として評価すべきであろう。

一方、戦後の2件はともに師弟愛の（之）像と名称が変わり、台風の記憶や犠牲者の慰霊のためというより、教師と生徒の絆を主とした教育愛を表現したシンボルになっている。すなわち、より普遍的な記念物に変化しており、名称の変化に反映しているといえよう。知恩院の師弟愛之像は「教育愛のシンボルで教育者の子供に対する深い愛情と強い責任感の結晶」、京都女子大学の師弟愛の像は同校の卒業生横山仁子和子訓導が身を挺して児童を護った「教育使命感と人間愛に対する顕彰で建学の精神を体現した人間像を示す像である」、とうたわれている。戦前期の慰霊碑が戦後に意味を変えて進化し、教育愛や師弟愛、人間愛のシンボルとして位置づけられ、建学の精神として評価されるという変化が生じている。時代の変化に伴って新たな意義や価値が付加されたものと評価できる。植村³⁹⁾が記載した10件の学校関係の風災記念碑はいずれも学校内または近くの寺院に設置され、学区および地域住民らが建立したものであった。今回の戦前の2件は新聞社および西本願寺系日曜学校が募金をよびかけており、より一般的な市民からの支援金により建立されたものといえる。それだけに、名称や目的の変更に対する抵抗も少なかったと推定される。

2. 製作者

戦前の2作は小倉右一郎と藤井浩祐という東京を中心

に活動し当時の彫刻界の指導的立場にあった著名な彫刻家に依頼された。小倉には関東大震災による児童の震災遭難児童弔魂像の制作などで知られた写実的表現に優れており、藤井は婦人像を中心とした美的表現に卓越した作品で著名である。また、戦後の日野は児童の群像と人間の絆をテーマにした作品で知られている。京都の3像はこれら彫刻家の特徴と作風を反映したもので、対照的な美しさを持つ作品であることが指摘できる。小倉、日野の作品はリアルな写実的表現、藤井の作品は清楚で愛情豊かな表現に特徴があり、芸術作品としての価値も高い。

3. 今日的意義

室戸台風の学校記念碑について植村⁴⁰⁾は京都市とその周辺に10件の存在とその特徴を明らかにした。さらに、今回検討したブロンズ製4件（1件は撤去）のうち3件を加えて13件が室戸台風関係記念碑として現存することが判明した。「師弟愛の像」の原像が知恩院および大谷本廟という仏教の聖地に置かれたことは、当時の社会における仏教の果たす役割の大きさを如実に反映したものであろう。第二次大戦をはさんで、台風犠牲者の慰霊記念碑の意義は大きく変化した。すなわち、慰霊と記憶のためのものから教師と児童の絆という教育使命の象徴としてとらえなおされている。これは時代と共に付与される価値と存在意義が進化したものだと理解できる。本論で取り上げた4件の室戸台風記念物の建立経過や変遷、存在意義について市民らに十分知られているとはいえない。以上述べた経緯を十分に理解した上で、災害頻発の現代において災害の文化遺産として広く周知され、減災や災害教育に活用されることが望ましい。

VI. まとめ

- 1) 京都市内には1934年室戸台風犠牲者に関連するブロンズ製『師弟愛の像』が4件存在する。それらの特

- 徴や建立の経緯、製作者について考察した。知恩院の2像および大谷本廟と京都女子大学の2像はそれぞれ親子関係にあることが明らかになった。
- 2) 旧像は、知恩院のものが風災学童慰霊塔、大谷本廟のものが関西風水害罹災学童碑であり、室戸台風による犠牲者の追悼、慰霊を目的として建立された。製作は前者が小倉右一郎、後者は藤井浩祐による作品で、いずれも東京を中心に活動する著名な彫刻家に依頼された芸術品でもある。
- 3) 戦後に建立された新像はいずれも師弟愛の像と名称が変化した。これは犠牲者の慰霊を目的とするものから普遍的な教師と生徒との師弟関係を重視する教育愛や人間愛のシンボルとしての意義が重視された結果である。この変化は新像が学校や地域住民との関係をもたず多くの市民らの献金により建立されたものであり、名称や目的の変更も容易であったと推定される。また、戦後の民主的教育観による新たな価値が付加され、建学の精神にまで評価されるに至っていることは注目される。
- 4) 現存する3件の師弟愛の像はその存在や経緯が市民に十分周知されているとはいえない。これらは室戸台風の災害文化遺産としての意義を再評価し、減災につなげる社会的・教育的活用が望まれる。

謝辞

本研究を進めるにあたり次の皆さんのご協力とご教示を得ました。吹田市立博物館五月女賢司、吹田市立豊津第1小学校戸田ひとみ、京都女子大学楠木純子、知恩院文化財保存管理部三枝樹典子、京都府立図書館福島幸宏、長浜市願通寺寺川幽芳、香川県立高松工芸高等学校太田豊、高松市松本周平、丸亀市立歴史博物館、新居浜市美術館菅春二、新居浜市立神郷小学校高須賀洋、西条市氷見公民館、東かがわ市湊定国幸子、さぬき市教育委員会山本一伸、同市秘書広報課出口俊明、香川県立ミュージアム田口慶太、千葉県八街市 Factory フェルマン佐々木実。記して皆様に厚く感謝申し上げます。

注

- 1) 大阪府編『大阪府風水害誌』、大阪府、1936、910頁。京都府編『甲戌暴風水害誌』、京都府、1935、194頁。京都市編『京都市風水害誌』、京都市、1935、198頁。
- 2) 川島智生『近代京都における小学校建築－1869～1941－』、ミネルヴァ書房、2015、350頁。
- 3) 1) に同じ。
- 4) 植村善博「室戸台風による京都市とその周辺の学校被害と記念碑」、京都歴史災害研究19、2018、13～24頁。
- 5) 文部省編『昭和9年9月関西地方風水害に於ける善行美蹟』、文部省、1935、188頁。
- 6) 京都府『嗚呼殉職四訓導』、京都府、1934、12頁。
- 7) 4) に同じ。
- 8) 羽賀祥二「一八九一年濃尾震災と死者追悼－供養塔・記念碑・記念堂の建立をめぐる－」、名古屋大学文学部研究論集史学、45、1996、253～284頁。北原糸子「東北三県における津波碑」、津波工学研究報告、18、2001、85～92頁。武村雅之『関東大震災を歩く』、吉川弘文館、2012、348頁。新谷勝行「北丹後地震の記念碑・供養塔と記憶の伝承」、『京丹後市の災害』、2013、205～220頁。武村雅之・都築充雄・虎谷健司『神奈川県における関東大震災の慰霊塔・記念碑・遺構（その1）』、名古屋大学減災連携研究センター、2014、100頁。武村雅之・都築充雄・虎谷健司『神奈川県における関東大震災の慰霊塔・記念碑・遺構（その2）』、名古屋大学減災連携研究センター、2015、148頁。武村雅之『復興百年誌 石碑が語る関東大震災』、鹿島出版会、2017、294頁。
- 9) これに関わる4件は塔、碑、像などと呼ばれているが、以下では師弟愛の像と総称する。
- 10) 京都新聞社編『写真でみる京都100年』、京都新聞社、1984、179頁。
- 11) 京都新聞 1960（昭和35）年9月21日朝刊。
- 12) 京都新聞 1960（昭和35）年10月22日朝刊。
- 13) 11) に同じ。
- 14) 新居浜市美術館「作家カード日野浩三郎」。
- 15) 新居浜市立郷土美術館「日野浩三郎彫刻遺作展パンフレット」、1986。
- 16) 京都日日新聞 1935（昭和10）年5月11日。
- 17) 16) に同じ。
- 18) 16) に同じ。
- 19) 京都日日新聞 1935（昭和10）年5月15日より5月29日まで9回掲載。
- 20) 京都日日新聞 1935（昭和10）年9月21日。
- 21) 京都日日新聞 1935（昭和10）年5月13日。
- 22) 日展史編纂委員会編『日展史11 帝展編六』、日展史編纂委員会、1983、440頁。
- 23) 香川県文化会館編『郷土先覚作家展－6 小倉右一郎 鴨幸太郎』、1973。
- 24) 香川県東かがわ市湊、定国聖一氏による資料「小倉右一郎人と作品」。
- 25) 田中修二『近代日本彫刻史』、国書刊行会、2018、337～340頁。
- 26) 日展史編纂委員会編『日展史7 帝展編二』、日展史編纂委員会、1983、190頁。
- 27) 東京都慰霊協会『震災遭難児童弔魂像ものがたり』、2018、11頁。
- 28) 香川県立高松工芸高等学校百周年記念誌編纂委員会『高松工芸百年史 礎』、香川県立高松工芸高等学校、1998、171～177頁、499～500頁、609～613頁。
- 29) 京都日日新聞 1935（昭和10）年9月21日。
- 30) 井原市立田中美術館・小平市平櫛田中彫刻美術館編『ジャパニーズ・ヴィーナス 彫刻家藤井浩祐の世界』、2014、6～19頁。
- 31) 田中修二『近代日本彫刻史』、国書刊行会、2018、292～298頁、343～368頁。
- 32) 井原市立田中美術館・小平市平櫛田中彫刻美術館編『ジャパニーズ・ヴィーナス 彫刻家藤井浩祐の世界』、2014、14頁。
- 33) 大阪府学務課編『大風水害殉職教員美談』、大阪府学務課、

- 1934、61～66頁および京都女子大学資料。
- 34) 田淵巖『日本殉職教育者全傳上巻』、大日本美談社、1936、150～155頁。
- 35) 京都女子大学宗教部 師弟愛の像パンフレット、1989。
- 36) 羽溪四明「師弟愛」、「自由」の像完成—二つのシンボル—、京都女子大学通信 17、1983、3頁。
- 37) 吹田市立豊津第1小学校『室戸風災を偲ぶ（写真アルバム）』、1983。
- 38) 京都女子学園編『京都女子学園八十年史』、京都女子学園、1990、41頁。京都女子学園編『新たなる旅立ち 心の学園1世紀の歩み』、京都女子学園、2000、4頁。
- 39) 4) に同じ。
- 40) 4) に同じ。

Abstract

Monuments of love between teacher and pupil in Kyoto city related to 1934 Muroto Typhoon and change of their meaning.

Yoshihiro Uemura

Many pupils and teachers were killed in school by destruction of schoolhouses by 1934 Muroto Typhoon. There were four bronze monuments of love between teacher and pupil related to Muroto typhoon in Kyoto city.

The two were built in 1935 after one year of the Typhoon, and were erected as memorial service for the dead in Chioin temple and Otani graveyard. Monuments were perfected the work by Uichiro Ogura and Koyu Fujii who were very famous and leading sculptors in Japan. But, monument of Chioin temple was removed by military offer in 1944.

Two of the rest were rebuilt in 1960 in Chioin temple and 1983 in Kyoto Women's University after the second world war. They are called as monument of love between teacher and pupil. The meaning of monuments was changed from memorial service before the war, to symbol of educational love and mission after the war. This change implies to be added new meaning to monuments as the demands of the times. These monuments of 1934 Muroto Typhoon must be made the best of significance of cultural and educational property for disaster mitigation.

Keywords: monument of love between teacher and pupil, memorial service, educational love and mission, 1934 Muroto typhoon, Kyoto city

